

ゲン 色あせぬ思い

金沢・NPO 紙芝居をCD-ROMに

2012年12月に73歳で死去した漫画家、中沢啓治さんの「はだしのゲン」の紙芝居を上演する動きが広がっている。金沢市のNPO法人「はだしのゲン」をひろめる会」が紙芝居をデジタル化し、昨夏からCD-ROMで販売したことで、手に入れやすくなった。ひろめる会の神田順一理事(64)は「温かさ、懐かしさを感じさせる紙芝居を通じ、原爆に遭いながらも強く生きるゲンの姿を多くの人に伝えたい」と話している。

【最上和喜】

紙芝居は1992年ごろ、汐文社(東京都文京区)が出版。ゲンが戦争を否定したこと、でいじめられたり、焼け野原で幼い妹のため、にミルクを探す場面などが1話16枚で描かれ、5話分が1セット。当時は1セット3万円、約3000セットを販売した。現在は絶版となっている。

神田さんは昨春、富山市で初めてこの紙芝居を見て「演じ手まで泣いてしまう迫力に、戦争の悲惨さを伝える力を感じた」という。「ぜひ地元の子供たちにも見せたい」と金沢市内の図書館に問い合わせたところ、使った形跡がほとんどない1

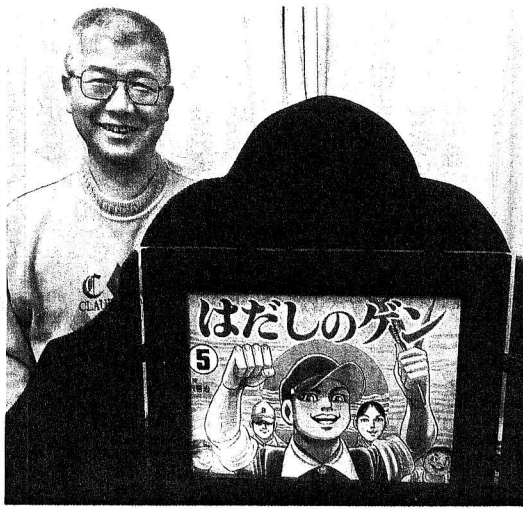
セットが見つかった。

色鮮やかな絵を見て「電子データにすればスクリーンに映せるし、印刷して紙芝居も作れる。ゲンの物語をより広く知ってもらうのに役立つ」と考えた。汐文社と中沢さんの妻

ミサヨさん(71)にデジタル化の許可を求め、快諾された。昨夏からひろめる会のホームページで告知。全国から問い合わせがあり、これまで14都道府県の個人・団体が計30セットを購入した。

昨年12月に購入した高知県平和委員会事務局長の和田忠明さん(74)は「戦争を乗り越え強く生きるゲンの姿は、きっと平和の大切さを教えてくれる」と話し、上演や貸し出し

の準備を進めている。「みんな食い入るように読み聞かせをしている群馬県伊勢崎市の石井晶子さん(67)も「原爆でゲンの家族が家の下敷きになる場面は、みんな食い入るように見つめます」と語る。送料込みで1セット1000円。問い合わせはひろめる会(076・242・6559)。



「はだしのゲン」の紙芝居を「たくさんの人に見てほしい」と話す神田順一さん(神田さん提供)